

語学力で幕末外交を支えた森山栄之助

平野 恵子

長崎では外国からの観光客の人達に道を聞かれることも多い。どぎまぎして答えたあと、自分の対応力のなさに打ちひしがれるのは毎度のことだが、その時いつも頭に浮かぶのが長崎を代表する蘭学者の一人・森山栄之助のことである。

幕府とペリーが交わした日米和親条約をはじめ、ほとんどの条約締結を陰で支えた通訳で、諸外国の外交官たちから日本で最も有能で信頼できる外交官と評されている森山だが、彼が長崎出身のオランダ通詞であったことは長崎でもあまり知られていない。

森山栄之助は、文政三年(一八二〇)長崎馬町のオランダ通詞森山家に生まれた。当時の長崎では通詞たちもオランダ語以外の外国語の必要性を感じ始めていた。やがて稽古通詞になった森山も英語を学ぼうと考えていたが、師となる者がいなかった。

その頃、日本への憧れから漂流民を装って捕鯨船から降り、北海道に上陸したアメリカ人、ラナルド・マクドナルドが長崎に移送されてきた。



遣欧使節団時の森山多吉郎(栄之助)

マクドナルドが松ノ森神社の参道近くの大悲庵内の座敷牢に軟禁されると、森山他十四人のオランダ通詞は奉行に願い出てマクドナルドより英語を学ぶ事の許可

を得た。格子を挟んでの授業は、マクドナルドがアメリカに送還されるまでほぼ毎日続いた。なかでも熱心で優秀だったのが森山だったと、マクドナルドは自著に書き残している。マクドナルドが去った後、森山たちは英語辞書の編纂に取り組んでいる。

嘉永六年(一八五三)、ペリーの来航を知った幕府は、すぐに森山を呼び寄せたが間に合わず、森山はとんぼ返りして長崎に戻り、当時開国を求めて長崎に入港してきたロシアのプチャーチン艦隊との交渉をサポートした。この交渉の功績で大通詞に昇格した森山にペリーの再来航が伝えられると、彼は休む間もなく江戸へ向かった。

幕府の煮え切らない態度に苛つくペリーに「わが国は今、暗闇から太陽の輝く場所へ出てきたばかりです。もう少し時間をいただきたい」と説く森山の高度な表現力は彼らを驚かせ、日本は武力で服従させられない国との印象を与えた。首席通訳官ウイリアムズは「森山は通訳がいないほど英語が堪能だ。彼の教養の深さと育ちの良さは我々に好印象を与えた」と書いている。

日米和親条約の交渉は、ペリー側から書面で確認したいと提案があり、両国ともオランダ語と漢語を仲立ちに条約交渉を進めた。アメリカ国立公文書館には、日本文、英文、漢文、蘭語文の日米和親条約が所蔵されているが、蘭語文の末尾には筆記体で書かれた森山のサインが残っている。その後も英国やオランダ、ロシアなど各国との和親条約の締結や、その後来日したアメリカ領事ハリスの世話役、日米修好通商条約締結の交渉など、彼は休む暇もなく幕府の外交を裏方として支えている。当時の森山の状況は、「英語の教えを乞に行くと、明日来いと言われ、行くと彼は江戸に呼び出されて留守だった」と福沢諭吉が不満を書いているように、明日の予定が立たないくらい多忙さが何年も続いた。この頃幕臣となり「多吉郎」と改名している。

文久二年(一八六二)、森山に海外渡航のチャンスが訪れた。一時帰国する駐日英国公使オールコックは、外交官としての能力をかつていた森山の同行を幕府に進言している。突然の海外渡航は森山にとって従者のいないプライベート旅行だった。船を乗り継いで三ヶ月に渡る旅の間に多くの船客たちと交流し、パーティや音楽会、異国のレストランでの食事など初体験を積極的に楽しんでいる姿は、国際人そのものとオールコックを大満足させている。やがて先行していた遣欧使節団に合流・英国・フランスなどを周り帰国した森山たちを待っていたのは、日本国情の変化で攘夷の運動が激しく、遣欧使節団関係者は身を潜めなければならぬ状態となり、そのまま幕末の混乱へと流されて行った。

慶応三年(一八六七)、再び時勢は変化し森山は外国奉行組頭として兵庫で居留地造成など開港準備にあたっていた。当時は王政復古の大号令から戊辰戦争へと突入していく混乱の中で、森山はイギリス領事館のアーネスト・サトウに現況を伝え、神戸居留地の運営を五カ国使節団に任せる手続きをし、大阪に残った幕府軍の残兵を江戸に運ぶ為に外国船をチャーターするなど幕府と日本の外交のために走り回っている。

明治維新、多くの通訳は新しい政府に使えたが、その中に森山の姿はなかった。彼は民間の通訳をしながら横浜で暮らし、明治四年、五十一歳でこの世を去った。ペリーの再来航以来十七年間、彼は一度も長崎に帰れないままだった。

幕末日本の外交の中心にいながら、黒子に徹した人生だった。しかし、森山はそれを悔いてはいなかっただろう。彼には日本の国際化に貢献できたという自負もあった。ただ、自分の言葉で外国人と付き合いたいという思いもあったに違いない。短い間だが外国人で賑わう横浜で、彼本来の姿を取り戻したのではないだろうか。

このような幕末維新の外交を支えた森山たち通詞の活躍を、多くの人達にもっと知って欲しいと考えている。(長崎歴史文化協会理事)

〔参考文献〕『幕末の外交官森山栄之助』『幕末外交と開国』『通訳たちの幕末維新』他

風信

暑中御見舞申し上げます。

〇八月は九日の「長崎原爆の日」、十五日は「敗戦の日」と、何んともなく寂しい

思い出が多い。

〇然し、最近の八月は十五日「お盆の精霊流し」、十六日は墓の中で生れた子供の為に其の母親が、毎夜「幽霊」になって餉を買いに行つたと言つ「産女のユウレン」の御開帳があり、供養の「餉ガタ」が配られる。(御開帳は長崎市伊良林光源寺・午前十時半より午後三時まで)

〇そして其の帰りには、すぐ近くの寺町三寶寺の閻魔堂に行き、先ず三途の川岸におられると言つ奪衣婆に手を合せ、十王閻魔大王像と大きな地獄相変図を拝し、本堂に行き伝恵心僧都筆二十五菩薩来迎図と有名な矢負ひの本尊弥陀如来に参詣すると、必ず極楽に往生すると言つ。

〇最後に、寺の前の坂を下り「うぐめの幽霊」が恩返しに、当時は水不足であった街の人達の為に与えたという「幽霊井戸の跡」を訪ねてみられるとよい。

〇七月十二日(土)午後「長崎県九條の会」本年度学習会が長大医学部良順会館にて開催。長崎・諫早・大村・長与等各団体代表多数参加、井田洋子先生の講演を中心に各地区よりの意見発表。大会終了後、平和記念公園まで行進、盛会だった。

〇七月十八日(金)長崎歴史文化博物館(長崎市立山町)で開催された「お化け屋敷で科学する展」の開会式に出席。現代の私達の抱える恐怖、それより逃がりたい心理と其の克服等、其の体験・学習など大いに学ばされた。(八月三十一日まで。入館料一、〇〇〇円・小中学生五〇〇円)

〇七月十九日(土)、長崎県美術館にて、シルクロードを歩き求道と鎮魂の画家で芸術家として大いに認められた平山郁夫先生の展覧会開催。長崎では初めての先生の回顧展で、其処には広島の人達と共に体験された被爆の大作「広島生変図」等。先生の絵画の中には求道と鎮魂、そして其の背景にある清澄な感情をみることができた。(八月三十一日まで)

〇七月、長崎市文化財課より「長崎歴史の学校コース」を来年度より開催するので各コースの講師派遣等の協力要請あり。了承しました。

八月は恒例の「夏休み」により左記講座は休講といたします。

- 一、長崎学講座(毎週月曜)二、古文書会(毎月第一、三火曜)三、水曜懇話会(毎週水曜)四、長崎食文化サークル(毎月第二・四金曜)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所二F

